

札幌の失われた川を尋ねて

宮坂 省吾

要旨

札幌は豊平川扇状地の上にある。150年ほど前に開拓使が札幌に入った頃、サッポロ川・コトニ川・ヨコシベツ川などと呼ばれていた扇状地の河川は自然景観の一員として自由に流れていた。

サッポロ川は、上流を現豊平川、下流を現伏籠川・篠路川とする石狩川の支流である。下流のフシコ川は、河川争奪に加え札幌の都市化・豊平橋の建設などによって上流が切り離され、小河川となった。西側の扇状地中央を網状に流れていたコトニ川は、サッポロ川より古い時代に形成されて、扇状地上に放棄された水系である。そのため、上流部は融雪期や洪水期にだけ水が流れる涸れ川となっていた。しかし、涸れた流路の砂礫層中には伏流水が流れ、それによるメム（湧泉池）からの大量の湧水が下流の川を潤していた。扇状地西端の低地にあったヨコシベツ川は、藻岩山などの渓流を集めて流れていた。

サッポロ川にはパラピウカ（広い石川原）が形成されていたが、その風景は瞬く間に失われた。しかし、現在でも時ならぬ大洪水の氾濫によってパラピウカが出現することもある。

1 サッポロはどこだ？

山田（1965）は、札幌の地が少なくとも300年前からアイヌの人たちによりサッポロペツ（乾いた・大きい・川）と呼ばれており、その名の元来の場所は平岸の段丘の下から中島公園まで広がっていたパラピウカ（広い・石川原）であると推察した。新しい扇状地を作っていたサッポロ川は、洪水後には乾いた大きい中州が現われて、幅1kmほどの広大で綺麗な礫の累積する河川地形を見せていたことだろう。その片鱗を、山田（1965）は中島公園上流の幌平橋で見つけた（図1）。当時す

でに両岸に堤防が築かれ、川幅は150mほどに狭められていたが、中州が幾重にも形成されていて広い石川原となっていた。

ここが、まさにサッポロだったのだ。

その下流の苗穂駅付近から篠路まで、サッポロ川の洪水で運ばれた砂が自然堤防を両岸に作っており、そこも洪水が引けば乾きやすい砂地となっていた。石狩川（現称は茨戸川）の近くから自然堤防の「乾いた砂地」が12kmほど上流まで続き、そこに「乾いた大地・サッポロ」が開けていたのだろう。

2 札幌の原風景

札幌市街から山鼻や円山にかけての地域は、約1万年以降に形成された札幌面と呼ばれる扇状地に立地している。かつて、そこでは豊平川やその分流として残った祖先河川に沿って発達する河畔林が形成され、中州の内部には茅野が広がっていた（図2）。茅野はハギ・ススキなどからなる草原で、カシワやミズナラが疎林をなしていた。これが最初の絵図に描かれた札幌の自然景観である。

山田（1965）は、札幌の川の原風景について「豊平川の分流、藻岩山、円山の山水、諸所にあった湧泉の水が、此の平野の中を、多くの小川になっ



図1 幌平橋で見つけたパラピウカ（山田 1965）

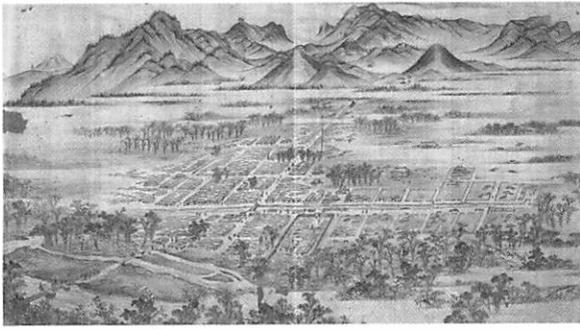


図2 河畔林や茅野が残る明治6年の札幌
「明治六年札幌市街之真景」船越長善(北海道大学植物園・博物館所蔵)

て、或は分流し、或は合流し、網の目のように流れていた。雪融けの頃になると、豊平川の水が溢れて今の市内を円山の辺迄横流し、池や小川を覆って湖沼のようになる事も多かったと云う。」と概観し、さらに「北一条の坦々たるアカシヤ並樹道だつて、数十年前は随分激しい高低があり、その低かつた処が川跡である。」と古い地形を看破した。

3 失われた川の記録

明治維新後、150年ほど前に開拓使が札幌に入った頃、扇状地には豊平川とその祖先河川が溢れており、サッポロ川・コトニ川・ヨコシベツ川などと呼ばれていた。しかし、開拓使による都市建設や農地開拓、橋梁や堤防の建設が進むとともに、サッポロ川やコトニ川は瞬く間に姿を消していった。

そのなかで、開拓使に雇われた画家や写真家たちは、開拓の記録とともに地形や植物の姿を画像として残した。また、草創期の札幌の開拓に携わった古老たちの思い出や談話が記録され、後に公開された(河野編 1978)。半世紀前、北海道自然保護協会設立の翌年、後に北海道文化賞を授与される山田秀三氏は「北の都の消え去った山河の名を懐かしみつつ書いた記録」として『さっぽろのアイヌ地名を尋ねて』を出版した。それは、地名とともに失われた自然をアイヌ語の解釈によって解明しようとするものだった。

山田(1965)は、札幌市大通り付近から北の河川名を解明したが、扇状地全体へは適用していなかった。河川系復元図は多いが、河川名に言及したものは少ない。そこで、筆者は「明治4年及5年札幌市街之図」(札幌史学会 1897: 図3)と開拓使時代の川の記憶(河野編 1978)に基づいて、失われた川の全体像の復元を試み、図3および図4に示すように古地図や河川図に河川名(案)を挿入した。読者に検討して頂き、ご意見を賜られ

ば幸である。

4 札幌面を流れていた川

札幌は豊平川扇状地の上に作られた都市である。豊平川扇状地は豊平川の右岸側(東側)にある平岸面と左岸側(西側)の札幌面に区分され、札幌面は平岸面よりも標高が低く、形成時代が新しい。

札幌面の古河川は、サッポロ川(アシリサッポロ川・フシコサッポロ川)、コトニ川(サクシコトニ川・チェプンペツ川・シンノシケコトニ川・コトニ川本流)、ヨコシベツ川に区分される(図4)。なお、本稿ではアイヌ語名に「川」を付して河川名であることを明示するが、分かりやすくするための工夫としてお許しいただきたい。また、アイヌ語地名の表記と解読は山田(1965)に依拠した。

札幌面の東部を流れていたサッポロ川は小さな扇状地や自然堤防を作って北に流れ、石狩川に合流していた。ところが、1800年頃の河川争奪により流路が東へ替わってアシリサッポロ川が成立し、上流を奪われたサッポロ川の下流はフシコサッポロ川と名を変えた(図3、図4)。

札幌面の中央から西にはサクシコトニ川やシンノシケコトニ川・チェプンペツ川(別名:セロンペツ)を含むコトニ川、西縁にはヨコシベツ川などが流れていた。これらは縄文時代の扇状地を作った古い川(祖先河川)の名残で、合流してシ

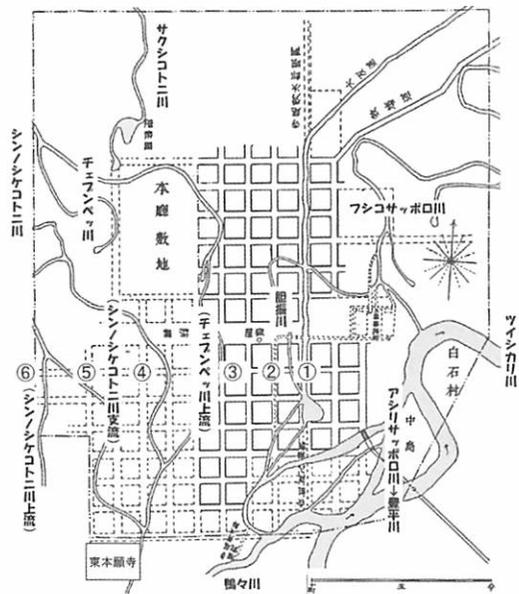


図3 札幌本府を流れていた川
「明治4年及5年札幌市街之図」(札幌史学会 1897「札幌沿革史」所載)
①~⑥: 南1条通りの川(大村耕太郎談: 河野編 1978)

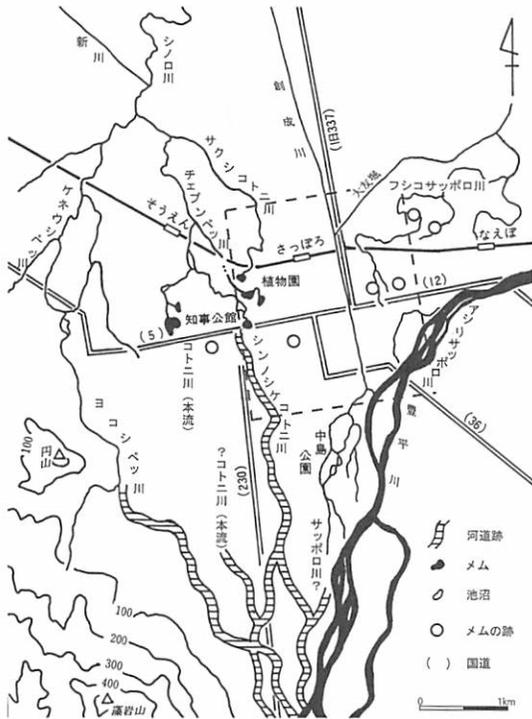


図4 札幌面を流っていた古河川(原図は地学団体研究会 1984:破線の四角は図3の範囲) 札幌史学会(1897)、山田(1965)、羽田(2003)に基づいて整理

ノロ川となり、フシコサッポロ川に流出する。

4.1 サッポロ川

サッポロ川は札幌市東茨戸で石狩川に合流していた河川で、現在の伏籠川・篠路川の祖先河川である。河川争奪によりツイシカリ川(対雁川:旧豊平川)に併合されたアシリサッポロ川(新しい・サッポロ川)は、開拓使時代に豊平川と呼ばれるようになった。

フシコサッポロ川

開拓使時代の前には、フシコサッポロ川(古い・サッポロ川:以下、フシコ川と表記)は北1条東3丁目付近で東西二筋の源流が合流して、その下流に古い流路を残していた(図3)。そのうち①と②はフシコ川の西の源流で、②は開拓使によって「胆振川」と呼ばれた自然河川だったが、数年後には人工水路に変えられて、フシコ川は西の源流を失った。

胆振川

胆振川の自然の姿は、図3の①や『明治二已歳十一月迄札幌之図』(高見沢権之丞 1869)に残されている。さらに、図5は札幌農学校クラーク先生の宿舍脇にあった池(図3①の南)の貴重な写真である。ここはフシコ川の分流が再び合流した



図5 南3条西1丁目にあった池「札幌本陣ヨリ南山ヲ望ム(明治4)」(北海道大学附属図書館編 1992より転載)

ところにできた池で、貯木場として使われているようだ。背景に藻岩山が控えている。これらの川は、鴨々川からつながってフシコ川の西側の源流をなしていた。

水路となった胆振川(図3の②)は、大通で東へ向かい、大通東1~4丁目にあった開拓使工業局器械場の動力などに使われた。札幌農学校ができたころには胆振川は流水を失ったようで、明治30年頃には僅かな凹地が残るだけだった。しかし、昔時を知る歴史家は「水系に於て最も記憶すべき古跡」と記し、河川の跡としての重要性を指摘した(札幌史学会 1897)。その頃の写真(図6)で、川沿いの微高地(中州あるいは自然堤防)に建った時計台(演武場)の様子が良く分かる。両側の低い所が、失われた胆振川の河床だったのだろう。

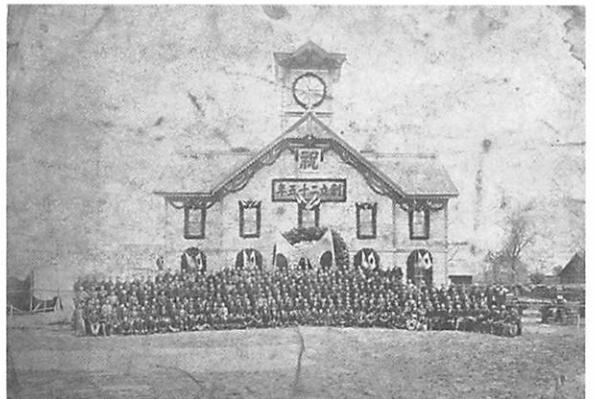


図6 札幌農学校演武場脇の低地(明治34年)「札幌農学校創基25年記念式典に際し教職員、学生、卒業生、来賓一同(演武場前)」(北海道大学附属図書館所蔵)

4.2 コトニ川

コトニ川水系のチェブンペツ川(図3の③)とシンノシケコトニ川(図3の⑥)はともにつながっており、サクシコトニ川などととも、一連の水



図7 北大植物園に残るチェブンペツの川跡（氾濫原）撮影：宮坂省吾

系であったと考えられる。コトニ川の流れていた地域は縄文時代の1万年前～6千年前に作られた扇状地であるから（大丸 1989）、コトニ川水系は主流路が東へ移動した後に扇状地上に放棄された古い川であると見ることができる。

サクシコトニ川

（浜の方・を通る・コトニ川：山田 1965）

偕楽園のヌブサムテム（野・の傍らの・湧泉池：山田 1965）や伊藤邸のテムに始まるサクシコトニ川は、チェブンペツ川の流路変更にもなって、上流が切り離されたものと推測される。北大の中央ローンを流れる川には広い氾濫原の地形が残っており、小さな川ではなかったことを示している。

チェブンペツ川

（魚が・そこに入る・川：山田 1965）

チェブンペツはこの川の古名で、後にアイヌが和人の蒸籠（蒸し器）の下にペツを付けてセロンペツと川名を変えたと解釈された（山田 1965）。チェブンペツ川はピシクシテム（浜の方・を通る・湧泉池：山田 1965）を源流として、コトニ川本流に合流していた。この川も、北大植物園で見ると流路幅が広く、小川ではなかった（図7）。古い時代には、札幌市中央区南7条西9丁目の東本願寺脇から道庁のすぐ東を流れていた川や（図3の③）、その派流で西6丁目付近を北西に流れていた川（図3の④）の下流をなしていたものだろう。それらの川に挟まれた道庁の庁舎を含む一帯は大きな中州で、そこに樹齢500年を越えると言われたハルニレが残されていた。北大植物園は、その西縁にある。

チェブンペツ川の上流は、市街化に伴って「新川」と呼ばれる西5丁目を通る水路に切り替えられ、上流を失ってピシクシテムが源流になった。そこで満々と水を湛えた幽庭湖（図8）などは、伏流水のエネルギーがなお絶えていないことを示



図8 明治時代末の北大植物園幽庭湖（現：湿生園）「農科大学附属植物園内幽庭湖（明治末）」（北海道大学附属図書館編 1992より転載）

していたが、その後まもなく昭和の初めにテムは涸れていたらしい（辻井 1976）。

シンノシケコトニ川

（まんなかの・コトニ川：山田 1965）

かつて「この川最も深し」と言われた西10丁目付近を流れていた川の下流である（大村耕太郎談：河野編 1978）。旧札幌病院（北1条西8丁目の旧リンケージプラザ）の西端を通過して北大植物園の西側に入り、北4条通りで園外に出て北西へ流れ、北6条西13～14丁目までコトニ川本流と合流していた。その上流は「（石山通り）に並行した広い深い古川があって、春でないと水が無い。南1条を越すと、ジグザグの川になり、北1条迄行くと川形が無くなっていた」（藤森三郎談：山田 1965）。そこは図3中央に描かれた河道跡の付近で、南2条通りあたりでは横断歩道の奥が低くなっていることから、古い川跡を偲ぶことができる（図9：場所は図3の⑥）。

藤森が述べた「下流側で川形がなくなる」現象は、河川の変遷を考える上で大事なことである。それは、古川が下流で砂利を堆積し、次第に涸れ川となって、流路を失っていく様子を示している。



図9 南2条通り(石山通りから東を望む)の古川の跡 撮影:宮坂省吾

川を埋め立てた堆積地は下流に傾斜し、伏流水からの湧き水が旧札幌病院付近のメム(湧泉池)を作ったのだろう(図4)。

また、旧札幌病院付近では、図10に示すように、川岸と考えられる斜面が西11丁目通りに向かって低くなっている。ここは「市立病院の正門の辺から西が降り坂みたいで、自転車に乗っていると走り出してしまうが、病院の西のはずれで終わった。」(藤森三郎談:山田1965)と言われたところである。今も残る貴重な河川地形の一つである。

網状流をなしていたチェブンペツ川とシンノシケコトニ川

チェブンペツ川上流(図3の③)と東本願寺付近で分流したシンノシケコトニ川支流(図3の④と⑤)は、JR桑園駅の北で再び合流している。このような流れは網状流と呼ばれ、扇状地河川の特徴である(図3、図4)。このように見ると、メムを源流とするチェブンペツ川とサクシコトニ川は、それぞれシンノシケコトニ川支流あるいはチェブンペツ川から切り離されたもので、元は網状流をなしていたと見る事ができる。

コトニ川本流

(コッネイ 凹地・になっている・所:山田1965)

明治時代、街中では“三井の川”と“植物園の川”の二つが主な川であったと言われており、前者はコトニ川本流、後者はチェブンペツ川である。山田(1965)はキムクシメム(山側・を通る・湧泉池)がコトニ川本流の源流で、チェブンペツ川のピシクシメムと似た形の池であったことを見出した。それらは網状流の相似形をなし、同規模のものであった。

明治時代の川の様子は、「(知事公館の)川の源は大きな湧水で、秋味(サケ:著者注)がどんどん上ったのを覚えている。北4条の辺で水流が広くなり、川巾は3、4間位であったか。川底は小砂利で、水の清い事天下一品、植物園の川より水量が多かった」という(藤森三郎談:山田1965)。

大正時代の末には、「北3条西15丁目(図11)に残った天然林の一面に、樹齢200年をこえるイタヤカエデの大木の森のなかに泉がわいており、こんこんとして清冽が流れていた」(加納1981)。

以上のように、コトニ川本流は街中で随一の川であったのに、上流の川跡や記述が少なく、はるか上流にそれらしい河道跡が描かれているだけである(図4:石山通りの南20条付近)。その主な理由は、より古いコトニ川本流が河川堆積物で埋積され放棄流路となってから、シンノシケコトニ川やチェブンペツ川へ流路変更したため、コトニ川本流の地形が不明瞭になったと考えられる。その結果、コトニ川本流の砂礫層に伏流した地下水がメムで湧き出していたと考えられる。

4.3 ヨコシペツ川

(いつも獲物を狙う川:山田1965)

ヨコシペツ川は、5万分の1地形図(明治29年版)で辿ることができる。それは、現在の界川や



図10 旧札幌病院跡(北1条西8丁目の旧リンケージプラザ)に残る河岸斜面 撮影:宮坂省吾

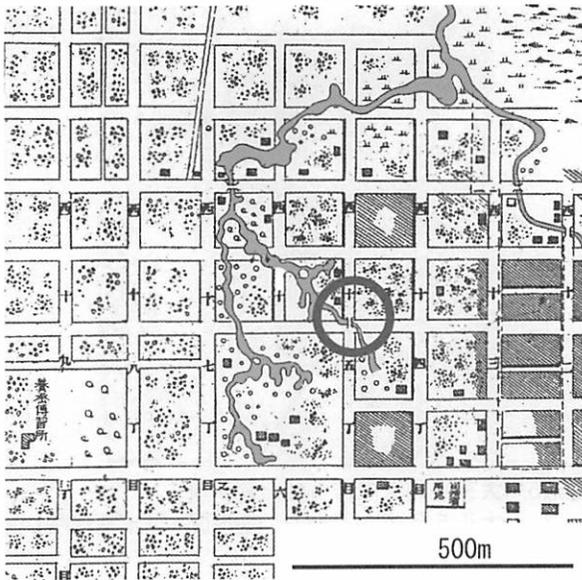


図11 “三井の川”と呼ばれたチェブンペツ（セロンペツ）川源流（○：加納宅）
「札幌市街之図(明治36年)」(札幌市教育委員会編 1978：札幌市中央図書館所蔵)

円山川などの西部山地からの溪流を併せながら北流し、鉄道線路の南でケネウシベツ川と合流していた(図4)。ヨコシベツ川の上流は、南21条あたりで「溪流伏見川」と呼ばれるほどの川だった(大山1927)。幸いにも、その10年後の写真を見ることができた(図12)。藻岩山の麓から東を見た風景で、右側に市電が小さく黒く写っている。その手前に傾く緩斜面が扇状地の本体で、その西側に残された低地に溪流(ヨコシベツ川)が流れていたであろう。

『コタンの口笛』の作者石森延男は、明治時代の末にこの低地に沿う「山根通」を通学路としていたようである。彼はそこで雪解けの水溜りに友達とともに溺れかけたが、アイヌの少年が助けてくれた。図12の風景の30年前には、川の風景の名



図12 ヨコシベツ川の広い川跡
1938(昭和13)年、藻岩山麓から東を望む(札幌建築観賞会提供)

残がまだ残っていたのだ。この思い出が名作『コタンの口笛』を生みだし、昭和30年頃の子供たちにラジオとテレビさらには映画で、偏見のない気持ちを持って教えてくれた。

4.4 シノロ川

コトニ川とヨコシベツ川(ケネウシベツ川を含む)は合流してシノロ川となってフシコ川に至ることは、すでに山田(1965)が解明していた。不明として残されたシノロの意味は、羽田(2003)によってシノロ川のアイヌ語解をシノ-コトニ-オロ(本流のコトニ川の処)のコトニを省略した形(シノ-オロ)として解明された。それは古い扇状地を作ったコトニ川水系とその名称に合理性を付与したものと考えられることから、筆者はこの見解に依拠するものである。

5 豊平川の変貌とパラピウカの消滅

開拓使時代の初期にわずかに残っていた川の風景は、交通の要衝への橋(豊平橋)の建設で一変する。その結果、豊平川と呼ばれるようになったアシリサッポロ川は一本化され、フシコ川の東側の源流も断たれてしまう。そして、豊平川に残っていた広い石川原は衰滅へ向かった。

5.1 明治初年のサッポロ川

明治4年(最初の豊平橋の建設前)の豊平川は分流と合流を繰り返す網状流をなしており、その派流は細い川筋としてフシコ川へ流れていた(図13)。豊平川の西の分流は鴨々川から現在の豊平橋付近への2~3本の流路を持ち、東の分流は現在の南7条大橋付近から豊平橋を通して蛇行して大通東5丁目くらいから一条大橋に至っていた(図13)。

5.2 豊平橋による狭窄化

最初の豊平橋は豊平寄りの本流に建設され、札幌側の3本の分流は埋めたてられて盛土道路となった(図13)。この結果、幅500mにも及んだ豊平川は60mほどの狭い流れとなり、自由を失った。狭められた水流は豊平橋から直進し、左に蛇行していた分流を放棄し、右の分流が優勢な本流へと変わっていった(図14)。

5.3 左分流と中洲の消滅

開拓使は、左分流を放棄して札幌側(西側)に洪水対策の堤防を築いたらしい。その結果、左分流は流入口を失い干上がってしまった。左右の分流のあいだにあった大きな中洲と豊平川左分流は



図 13 現在の地図に落とした明治 4 年の豊平川旧図から「地理院地図（国土地理院）」への水系トレースは関根達夫氏による。



図 14 現在の地図に落とした豊平橋建設直後（明治 11 年）の豊平川旧図から「地理院地図（国土地理院）」への水系トレースは関根達夫氏による。

失われ、荒地として残る。左分流の川岸には遠友夜学校や北海寺が建てられ、さらに後に荒地は市街地となった。

5.4 大正の大洪水で作られたパラピウカ

今から 100 年余り前の 1913（大正 2）年、豪雨が豊平川に大洪水をもたらした。この大正の大洪水は豊平川扇状地上流の川沿地区や藻岩下地区で溢れだし、図 15 に示すような新しい川筋が網状に

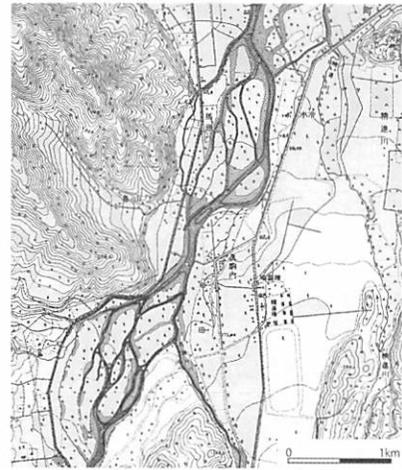


図 15 大正大洪水で作られた網状流
大正 5 年版 5 万分の 1 地形図（国土地理院）を使用

作られた。図中の黒い線は流路、その周りの灰色の所は洪水礫層の堆積地である。その様子は「パラピウカ」そのものと思われ、この光景を俯瞰することができたなら、山田秀三氏も「大洪水がパラピウカの成因」であることを見抜いたことであろう。

残念ながら、この時の洪水堆積物や洪水跡の様子を撮った写真やスケッチは、まだ見つからない。しかし、この状況こそが自然河川での豊平川洪水の実態を示すものであるとともに、札幌の原風景であるパラピウカの成因を偲ばせる貴重な資料となると思われる。

5.5 今見ることのできるパラピウカ

“自然の流れをふるさと思ふ”、それは札幌人の共通の思いだったようで、山田（1965）や浦田（2011）は写真やスケッチで風景を残した。そればかりではなく、かつてのサッポロ川（乾きやすい大きな川）の面影は、豊平川の堤防のなかにあっても、ちゃんと生き残っていることが分かった。

その片鱗は、2014 年 9 月の洪水が化粧直ししてくれた幌平橋下流のハート形砂州に見ることができる（図 16）。このような砂州が幾重にも連なって、パラピウカを作っていたのだ。このことは、都市化によって縮小された風景から、相似形のあるいは積み重なった広大な原風景を想像することの大切さを、私たちに教えてくれている。失われた川の復元は難しいが、失ってはならない風景を残すことはできる。サッポロが札幌である由縁、パラピウカを私は忘れないだろう。



図 16 洪水で化粧直しをしたハート形砂州（パラピウカの縮小形）

6 おわりに

山田秀三は金田一京助、知里真志保や高倉新一郎ら 20 世紀に生きた碩学の学問的援助を受け、アイヌ語の検討によって札幌の地名と自然を解き明かしていった。彼が昭和 30 年代に幌平橋で見つけた「サッポロの原風景」パラピウカは、まもなく、豊平川の複断面化（低水路工事）^{注1}によって失われてしまった。

札幌の原風景を見つけることは難しくなりましたが、扇状地に住んだ人びとの記憶と自然の記録はまだ埋もれていることが多いだろう。それらを集めて語り継ぐことによって、山田たちの業績にさらに深みと広がりを加えることができる。それは、過去に豊平川で起ったことや、これから起ることを考えるための基礎資料となるであろう。

大都市となった札幌は、再び衣替えをして「古き良き札幌」をさらに変貌させようとしている。開拓前の自然地形の痕跡もまた、さらに消滅するだろう。北海道 150 年を迎えるにあたって、失わ

れた自然景観に関する記録と記憶をさらに収集して整理しておくことが求められている。

引用文献

- 大丸裕武 (1989) 完新世における豊平川扇状地とその下流氾濫原の形成過程. 地理学評論, 62A-8, 589-603.
- 羽田信三 (2003) シノロ 140 年のあゆみ. 加藤隆司 (発行), 1041 p.
- 北海道大学附属図書館編 (1992) 明治大正期の北海道 (写真編). 北海道大学出版会, 270 p.
- 石森延男 (1957) コタンの口笛あらしの歌. 東都書房, 381 p.
- 加納一郎 (1981) 山・雪・森霧藻庵雑記. 岳書房, 282 p.
- 小島 覚 (1962) 札幌に残存する自然植生の群落学的研究. 昭和 37 年度北海道大学農学部修士論文.
- 河野常吉編 (1978) さっぽろの昔話〈明治編〉(上下). みやま書房, 上 172 p. 下 172 p.
- 大山黙笑 (1978) さっぽろの昔話〈大正編〉. みやま書房, 164 p.
- 札幌史學會 (1897) 札幌沿革史 全. 256 p.
- 札幌市教育委員会編 (1978) 札幌歴史地図〈明治編〉, さっぽろ文庫・別冊. 北海道新聞社, 39 p.
- 白戸暢彦・田代隆志・奥山昌幸 (2015) 豊平川の河道変化に対する対策工の検討について. 国土交通省北海道開発局第 59 回 (平成 27 年度) 北海道開発技術研究発表会, 164 p.
- 辻井達一 (1976) 「北大植物園」HTB 豆本. 61 p.
- 浦田 久 (2012) スケッチで見るさっぽろ 昭和の街角グラフィティ. 亜璃西社, 175 p.
- 山田秀三 (1965) 札幌のアイヌ地名を尋ねて. 楡書房, 176 p.

宮坂 省吾 (みやさか せいご)

長野県生まれ。北大理学部卒。「日高山脈形成史」で学位(理学博士)。2010 年代に入ってから支笏湖苔の洞門や豊平川において最近数百年の洪水や侵食などの観察に携わっている。著書に「北海道自然探検 ジオサイト 107 の旅」(北海道大学出版会, 2016 共著) などがある。

注 1 複断面化(低水路工事)：幅の広い河川は、河川改修によって、常に水が流れる低水路とそれより高く洪水時に水が流れる高水敷(普段はグラウンドや公園として使用)の 2 段(複断面)とされることが一般的である。豊平川では、低水路を固定化する工事が 1971 (昭和 46) 年以降に行われ、自由に蛇行氾濫していた河道から低水路での河床低下が顕著となる河道へと替わった(白戸ほか 2015)。